

男子学生のクラミジア感染症に対する意識と知識に関する調査

松本 明美¹, 山口 玲子², 神崎 慶子²
登喜 玲子³, 鈴井江三子⁴, 秀平 佳織

Male College Students' Knowledge of and Attitude toward Chlamydia Trachomatis Infection

Akemi MATSUMOTO¹, Reiko YAMAGUCHI², Keiko KANNZAKI²,
Reiko TOKI³, Emiko SUZUI⁴ and Kaori HIDEHIRA

キーワード：クラミジア, 男子学生, 意識, 知識

概 要

厚生省の調査では, 1993年から性感染症の中ではクラミジア感染症の患者数が1位となり増加傾向にある。また10~20代の若年層や未婚者に感染率が高い。そこで男子大学生と社会人男性を対象にクラミジア感染症を中心に, STD (性感染症 sexually transmitted diseases) についての意識と知識の調査を行い, 両者を比較した。両者とも STD 全般についての関心はあるが, クラミジア感染症については関心も認知度も低い。知識テスト (10点満点) の得点は学生 3.60 ± 2.32 , 社会人 5.10 ± 2.62 で学生の知識が低い ($P < 0.05$)。学生は気になるSTDも自分が罹るかもしれないSTDもAIDSを一番に挙げその他の疾患についての危惧は少ない。社会人はAIDSよりも感染率が高く, 患者数の多い淋病や梅毒を危惧している。学校における性教育ではAIDS教育に主眼が置かれているが, クラミジア感染症に対する教育の推進は重要な課題であり早急に検討, 実践していく必要がある。

緒 言

STDの中で, 現在クラミジア・トラコマチス感染症 (以後クラミジア) は, わが国において最も蔓延しており, 1993年から淋菌感染症を凌ぎ第1位になった。加えてクラミジアは未婚者¹⁻³⁾や10~20歳代の若者の感染率が高く, 職業別にみても学生, OLに多くみられる¹⁾。性風俗業界でのコンドーム使用の徹底をはかったエイズ予防キャンペーンにより淋菌感染症は激減したが, クラミジアの場合は無症候性の素人間で

の感染機会が多く, コンドームの使用が徹底されず減少していない⁴⁾。また当院産婦人科外来でもハイリスクグループにおけるクラミジアの抗体陽性率は60%以上と高く (1996年1~10月調査), クラミジアに関する意識や知識の低さが示された。クラミジアは妊娠や, 出生時の新生児に悪影響を与え⁵⁻⁶⁾、男性に対しても尿道炎や膀胱炎, 精巣上体炎を起こすなど^{4,7-9)}生殖生理に影響を及ぼす疾患であるため, 生殖年齢にある若年層に対する保健指導が急務であると考えられる。女子学生を対象になされた調査¹⁰⁾を踏まえ, 今回男子大学生と社会人男性との意識や知識の比較を中心に調査をした。男子学生の特徴や問題など若干の知見を得たのでここに報告する。

研究 方法

1) 調査期間および対象

1997年9月~1998年1月

(対象1) 岡山県南部の4年制医療系大学男子学生50名

(対象2) 岡山県南部の社会人男性78名

(平成10年9月17日受理)

¹川崎医療短期大学 第二看護科, ²川崎医科大学附属病院, ³川崎医療短期大学 第一看護科, ⁴川崎医療福祉大学医療福祉学部 保健看護学科

¹The Second Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

²Kawasaki Medical School Hospital

³The First Department of Nursing Kawasaki College of Allied Health Professions

⁴Department of Nursing Faculty of Medical Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare

2) 調査方法

自記式質問紙調査(無記名)で対象1に対しては講義終了後、女子は退出してもらい、男子のみに質問紙を配布した。プライバシーが守られるように回収し、白紙提出も可能にした。対象2に対しては調査の主旨を個別に説明したうえで質問紙を配布し、後日郵送してもらった。対象1は回収率有効回答率ともに100%,対象2は回収率55%,有効回答率54%であった。

すべてのデータはコンピュータに入力し、統計ソフト SPSS V6.1を用いて処理した。

3) 調査項目

- (1) 年齢(学生のみ) 科・学年
- (2) 性交経験の有無
- (3) STD についての関心
- (4) クラミジア感染症についての関心や認知度、情報源

(5) クラミジア感染症についての知識テスト
知識テストについては、アメリカの White¹¹⁾の知識調査を基に、松浦らが看護学生を対象に実施したテストを参考にして男性対象用に若干手を加え、10問からなる正誤で回答できる問題とし10点を満点とした。

結 果

1) 年齢構成および性交経験の有無

年齢構成は図1に示す。学生の年齢 19.6 ± 1.4 歳、社会人の年齢 29.2 ± 8.9 歳。性交経験の有無は図2に示す。社会人が有意に性交経験者が多い($P < 0.05$)。

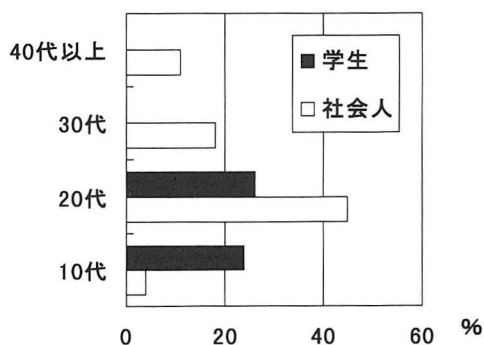


図1 年齢構成

2) クラミジアについて

(1) 認知度

表1から学生の40%, 社会人の50%は全くクラミジアについて知らず、言葉だけしか知らないものと合わせると8割は認知していなかった。ただし両者間に差はなかった。

(2) 情報源

上記でクラミジアを知っていると答えた者の情報源を図3に示す。学生、社会人ともに雑誌からの情報が多かった。学生は学校やテレビからの情報がそれに続き、社会人はテレビや友人から情報を得ていた。

3) STD に対する関心

「STD に対する関心」を図4に、「クラミジ

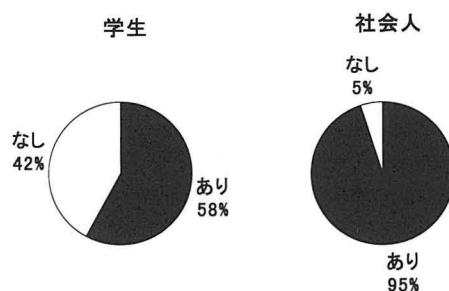


図2 性交経験

表1 クラミジアについての認知度

	学 生	社会人
全く知らない	40	51
言葉のみ知っている	48	31
少し知っている	0	1
詳しく知っている	0	1
		(%)

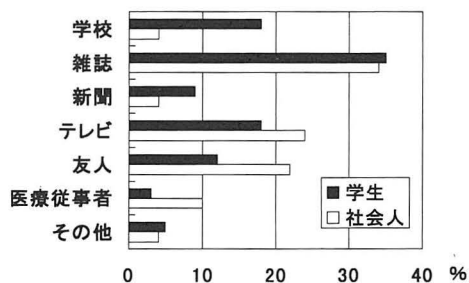


図3 クラミジアについての情報源

アに対する関心」を図5に示す。STDについては学生56%，社会人59%の者が関心があると答えた。しかし、クラミジアについては学生4%，社会人8%の者しか関心がなかった。両者ともクラミジアについての関心は極めて低かった。両者の割合での差はみられない。

4) 性交時気になる（心配な）STD

性交経験あり、なしにかかわらず全員に実際に自分達が性交する（するであろう）時に気になる（心配な）STDについて回答してもらった図6。学生、社会人ともにAIDSが最も多く、学生は92%，社会人は87%であった。学生ではAIDS以下、梅毒、淋病が30%程度で、クラミジ

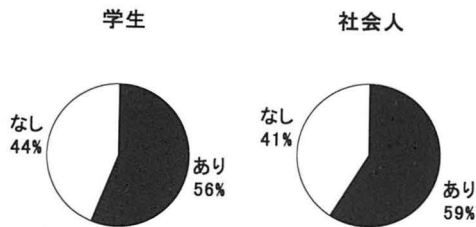


図4 STD についての関心

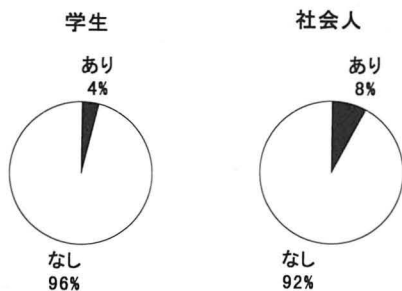


図5 クラミジアについての関心

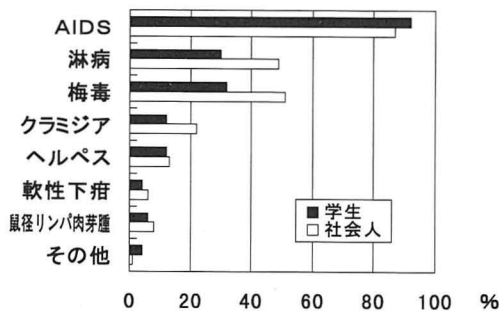


図6 気になる（心配な）STD

アは18%と少なかった。一方、社会人は、AIDS以外にも梅毒や淋病に対しては半数が不安をもっており、その他の STD についても割合は低い STD 全般に対する不安が学生より多い傾向にあった。

5) 自分が罹る可能性のある STD

自分が罹る可能性のある STD を図7に示す。自分が罹る可能性がある（うつりやすい）と思う STD については、46%の学生が AIDS をあげた。しかしそれ以外の疾患をあげた者は少なかった。社会人では気になる STD に AIDS をあげた者が一番多かったが、罹る可能性があると思う STD として、AIDS (22%) よりも、むしろ淋病や梅毒のほうが多かった。

6) クラミジアについての知識

クラミジアについての知識テスト(10点満点)の得点は、学生 3.60 ± 2.32 、社会人 5.10 ± 2.62 で社会人の方が有意に高かった ($P < 0.05$)。得点別人数割合を図8に、年代別に平均得点をみたものを図9に示す。得点別割合では、社会人は7点の者が20%と最も多く、9点や10点という高得点の者もいる。学生は4点の者が25%と

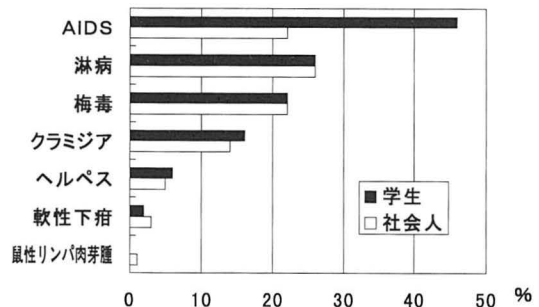


図7 罹る可能性のある STD

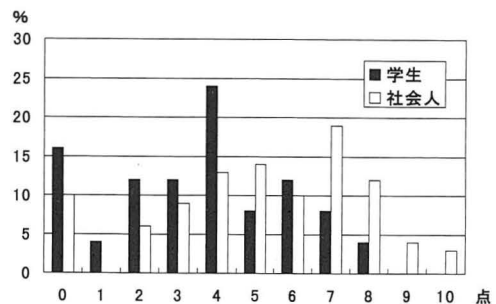


図8 知識テスト得点分布

最も多く、社会人と異なり高得点の者はいなかった。年代別平均得点では、社会人の20代が最も得点が高く30代がこれに次ぐ。同じ10代、20代でも社会人のほうが学生より平均得点が高い(20代のみ $p < 0.05$)。

知識テストの設問毎の正解率を表2に示す。両者とも正解率の高低は似たような傾向だった。設問毎にみると、クラミジアが性感染症であるかどうかの設問に対する正解率が両者とも最も高く65~72%であった。その他6割を超えた正解率は、コンドームが予防に効果があるというもので、それ以外の問題の正解率は低かった。特に症状、病因に関するものの正解率が低く、淋病などの症状と間違えている者が多い。気になる項目としては、半数の者が膣外射精が予防に効果があると思っていたり、7~8割の者がオーラルセックスでは感染しないと思っていた。

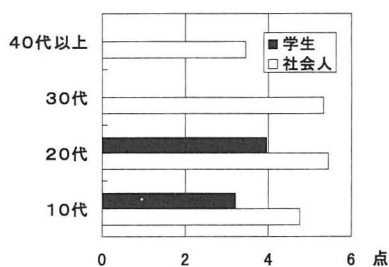


図9 年代別平均得点

表2 知識テストの正解率 (%)

設 問	正誤	学 生	社会人
1. 性交で感染する	正	72	65
2. 男性の感染者が多い	誤	26	31
3. 排尿時痛と尿道からねばっこい膿がでる	誤	10	25
4. 無症状の場合が多い	正	26	23
5. 治療が困難	誤	32	38
6. コンドームが予防に効果的	正	62	61
7. 膣外射精が予防に効果的	誤	56	50
8. オーラルセックスでは感染しない	誤	32	26
9. 原因はウイルスである	誤	8	23
10. 不妊症や流・早産の原因になる	正	28	27

考 察

STD全般についての関心は学生・社会人共に6割の者がもっていた。しかしクラミジア感染症については、どちらのグループもほとんど関心をもっていなかった。したがってクラミジア感染症についての認知度も当然低かった。

性交時に気になる(心配な)STDは学生、社会人ともにAIDSと答えた者が最も多かった。しかし社会人はAIDS以外にも梅毒や淋病などは半数の者が不安をもっており、その他についても割合は低いながらもSTD全般に対する懸念を持っていた。しかし学生はAIDS以外のSTDに対する不安は少なかった。また、自分が罹るかもしれない(うつりやすい)と思うSTDについては、学生はAIDSが圧倒的に多かったが、社会人はAIDSよりもむしろ淋病や梅毒の方をあげていた。STDの感染率についていえば、1回の性交でHIV(ヒト免疫不全ウイルス)0.1~1.0%、淋菌50%、クラミジア30%^{7,12)}でHIVの感染率は低い。疫学調査によっても、HIVとは比較にならない多数のクラミジア感染症や淋病の感染者が報告されている^{2,4,8)}。図7の結果から学生よりも社会人のほうが、より現実的にSTDについて考えているといえる。日本では1989年に「後天性免疫不全症候群の予防に関する法律」が制定され、学校などでもAIDSに対する教育が始まっている。学生の意識の中では、AIDSに対する不安や懸念は強いが、より一般的で頻度の高い他のSTDについての危機感は少なかった。これはSTD全般についての知識を得る機会が乏しかったことによるものと推測される(図8、図9)。

松浦ら¹⁰⁾が医学的知識を得る機会の多い看護学生に行った同様のテストでは平均得点 4.2 ± 2.7 であり、この成績はわれわれが行った男子大学生よりも得点は高いが、社会人男性より低い。この得点は、同じ10代、20代の比較でも学生より社会人の方が得点が高く、社会経験による知識の差が示唆される。松田¹¹⁾は東京都内の女子におけるクラミジアの職業別検出状況に関する調査で、特殊浴場勤務や会社員、公務員、主婦よりも学生の検出率が高かったことを報告している。これには多くの原因が考えられるが、学生

には少なくとも知識面での不足が感じられる。

知識の情報源については、学生も社会人も雑誌からのものが最も多かった図3。しかし脇¹³⁾によると、情報誌の中で性病や避妊に関する記事の占める割合は1.6%に過ぎず、性の商品化を促す傾向が強いという。したがって雑誌からSTDについての正しい知識が充分に得られているかどうかは、はなはだ疑問である。雑誌以外では、学生は学校やテレビから、社会人は友人やテレビから情報を得ている。このことは、学校は正しい知識の情報発信基地になっていないことと、同じ年代でも限られた年齢層の集団に属する者と、年齢も知識も多岐にわたる社会集団で活動する者との間の人的環境の差が現れているものと考えられる。

知識テストではいくつかの気になる結果が出た。原因菌や罹患後の障害など専門的なものはさておき、特に症状に関する正解率が低かった。潜伏期が1～3週間と長く¹⁴⁾、症状の全く出ないキャリア^{1-2,7)}が無視できない割合で存在するこの疾患に対する理解度は大変低いといえる。また予防の方法についても、他の項目より正解率が高いとはいえ、半数の者が膣外射精が予防に効果があるなど誤った知識しか持っていない。また最近では泌尿器科医の数グループが、女子の咽頭を感染源とする男子クラミジア感染者の報告をしている^{4,9,16-18)}。円柱上皮に親和性の強いクラミジアは当然、咽頭や直腸にも感染する。

小島^{16,19)}らの調査では、淋菌感染者の場合33%の頻度で淋菌が、クラミジア感染者の場合10%の頻度でクラミジアが咽頭から検出されたと報告している。今回の知識テストでは、オーラルセックスでは感染しないと答えた者が7～8割おり、性行動の調査^{16,18)}では70～80%の男性がそれを実施している現状や、商品化された風俗産業の存在から推し測っても、STDに関する正しい知識の普及は急務であると考えられる。広瀬⁷⁾らが指摘するように、クラミジア感染症は無症候性の一般人での感染機会が多いこと^{1,2,8,11,14)}、中には重篤な急性腹症を伴うものがあること²⁰⁾、不妊症や子宮外妊娠、流産、PROMなど多くの後続疾患⁵⁻⁶⁾があることなどからも治療医学だけでなく、10代20代の若年層の感染率が高いことから、学校教育の中で対処していく必要がある。

宮原²¹⁾らが行った大学生のAIDSに対する知識調査によると、感染経路については90%の正解率であり、正解率が低かった感染力についても60%であった。これらは今回のクラミジアに関する正解率よりもはるかに優れている。またAIDSについての情報源として、学校や教師と答えたものが以前は3.4%だったものが4年間で23.8%と増加している²¹⁾。このようにAIDS教育は少しずつ浸透し、何らかの効果を上げつつあるといえよう。これに対しクラミジア感染症の若年層への蔓延を考えると、「AIDSの陰にクラミジアあり」の言葉どおり、クラミジア感染症に対する教育の推進は重要な課題であり、性教育の方法も含めて早急に検討、実践していく必要がある。

本研究の一部は、第17回日本思春期学会総会学術集会(1998, 8, 21東京)で発表した。

文 献

- 1) 松田清治：クラミジア感染症の疫学，産科と婦人科62(5)：619—625，1995。
- 2) 塚本泰司，他：STDの原因微生物の特徴およびSTDの疫学，臨泌50(2)：109—115，1996。
- 3) 野口昌良：クラミジア感染症，臨婦産46(11)：1317—1319，1992。
- 4) 小島弘敏：エイズキャンペーンの男子尿道炎症例数に及ぼした影響，日本公衆衛生雑誌(7)：545—549，1996。
- 5) 河上征治，青木豊和：クラミジア感染と不妊症，子宮外妊娠，産科と婦人科62(5)：655—659，1995。
- 6) 竹田 省，木下勝之：周産期のクラミジア感染症，産科と婦人科62(5)：661—664，1995。
- 7) 広瀬宗興，塚本泰司：男子の尿路・性器STD臨泌50(5)：295—302，1996。
- 8) 熊本悦明，他：尿路性器クラミジア感染症の疫学調査，日本感染症誌5(1)：32—42，1994。
- 9) 白神健志，他：岡山済生会総合病院における男子尿道炎の現況，日性感染症誌3(1)：1994。
- 10) 松浦賢長，他：看護学生のクラミジア感染症に対する意識と知識に関する研究，母性衛生35(1)：67—71，1994。
- 11) White D. M, Feits, W. M: Knowiege of Chlamydial Infection among University Students: Health Educ. 20(7)：23—26，1989。
- 12) 小野寺昭一：STDの予防臨泌50(8)：561—566，1996。
- 13) 脇麻由美，他：思春期の性に及ぼすマスメディ

- アの影響について, 日母性衛37(3):308—309, 1996.
- 14) 佐治文隆, 他: 不妊症・流産とクラミジア感染, 産婦人科治療69(1):44—49, 1994.
- 15) 林 謙治, 他: 無症状の若年成人男子における *Chlamydia trachomatis* 感染率, 感染症学雑誌64(11):1447—1452, 1990.
- 16) 小島弘敬: 性器外セックスによる STD, 産科と婦人科64(4):497—505, 1997.
- 17) 丸山治朗: 性行動と STD, 産婦人科療69(1):32—36, 1994.
- 18) 鈴木恵三, 他: フェラチオによる男子尿道炎, 日性感染症誌3(1):115—118, 1992.
- 19) 小島弘敬, 高井計弘: 淋菌またはクラミジアによる尿道炎および頸管炎患者の咽頭, 直腸における淋菌, クラミジア陽性率, 感染症誌68:1237—1241, 1994.
- 20) 宮本由美子, 他: 思春期女子のクラミジア感染症, 思春期学14(3):330—334, 1996.
- 21) 宮原春美, 他: 大学生の AIDS に対する知識と意識および性行動, 思春期学14(4):267—271, 1996.